

Spiritualism News Letter

2002
第 17 号

4月1日発行

スピリチュアリズム・ニュースレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場

発行人/小池里予

〒441-3147愛知県豊橋市大岩町字火打坂18

TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257

ホームページアドレス <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

今号の内容

・霊的視野を身につけましょう

地上世界のすべてを、霊的視点から見るのがスピリチュアリズムの基本です……………1

・スピリチュアリズムから見たTM瞑想と伝導瞑想……………15

・スピリチュアリズム・トピックス アメリカ・イギリス事情……………25

霊的視野を身につけましょう 地上世界のすべてを、霊的視点から見るのが スピリチュアリズムの基本です

1 || 霊的意識と肉体意識の断絶

霊的視野について理解するために、まず霊界人の意識と、私達地上人が持つ意識の違いを比較してみることにしましょう。霊的視野とは言い換えれば——「霊界人の意識・霊界人の視点」ということです。

霊界での、バーバネルとシルバーバーチの 打ち合わせ

シルバーバーチは高級霊界の神庁において、地上圏へ降り、霊的メッセージを地上に届ける仕事を引き受けてくれないかと要請されました。シルバーバーチは、それを自分の使命として引き受けました。ここからシルバーバーチとスピリチュアリズムとの係わりが始まることになります。

シルバーバーチはその使命を実行に移すために、まず自分のメッセージを受け取ってくれる「霊媒」を探すことに着手します。霊界の記録簿を調べ、将来の自分の霊媒にふさわしい者としてバーバネルを選びました。

シルバーバーチの言によれば、シルバーバーチとバーバネルと（地上でバーバネルの妻となった）シルビアは、同じインディビジュアリティに属するそうです。すなわち「同じ類魂の仲間」であるということです。おそらくシルバーバーチは、その類魂の指導霊であったと思われます。

シルバーバーチは、同じ類魂のメンバーであるバーバネルに、将来、地上に再生し、自分の霊媒としてスピリチュアリズムのために働いてくれないかと話を持ちかけました。バーバネルはその要請を受け入れ、地上に再生して、シルバーバーチの霊媒となって働く決心をすることになります。そしてこの歴史的な霊界通信を成功させるために、それをサポートする強力な霊団（*シルバーバーチ霊団）が結成されることになりました。

バーバネルは、シルバーバーチや、再生時に自分の守護霊となる類魂の仲間の霊と綿密な打ち合わせをし、いよいよ地上に再生することになります。こうしてバーバネルの地上人生が始まりました。シルバーバーチを指導霊とする霊界の霊団は、バーバネル霊が受精する瞬間を注意深く見つめました。そしてバーバネル霊が母胎に宿った瞬間から、その育成と精神の形成に関与していくことになります。バー

パネルの育成には、絶えず霊界側からの働きかけがなされ、将来の「霊媒」に向けて着々と準備が進められていきました。

地上へ誕生後のバーバネルの意識

ところが地上に誕生してからのバーバネルは、霊界でのシルバーバーチとの約束を思い出すことはありませんでした。霊界であれば、地上で霊媒として働いていく強い自覚と決意を固めていたにもかかわらず、それを全く思い出すことなく成長していきます。

18歳までのバーバネルは、霊的なことに興味も体験もなく、将来はビジネスマンとして大きな仕事をしたいという野心を持っていました。バーバネル自身が語ったところによれば、彼の十代の頃は、スピリチュアリズムに対して、むしろ反感を抱いていたそうです。両親の宗教に対する議論を見て育つ中で、彼は次第に無神論に傾き、それから不可知論へと変わっていったと述懐しています。

やがてバーバネルに、霊界での約束を果たす時期がやってきます。18歳の時、婚約中のシルビアをともなって、ブロースタインという中年の女性霊媒の交霊会（ホームサークル）に出席することになりました。そこでバーバネルは、初めて自分が「霊媒」の体験をすることになります。彼は無自覚のうちにトランス状態に入り、彼の口を通じて、シルバーバーチの第一声が発せられることになったのです。

「霊的意識」を失ってしまう地上人

今述べたようなバーバネルが霊媒になるまでのいきさつについては、『シルバーバーチの霊訓』によって、すでにご存じのことと思います。さてここで注目すべきことは、霊界でのバーバネルは、「再生時には霊媒になる」と決意していたにもかかわらず、地上に生まれてからはそのことを全く意識することがなかったという事実です。

バーバネルは霊界での意識を思い出すどころか、スピリチュアリズムに反発さえしてきました。18歳になるまでは、バーバネルは自分が霊媒になるなどとは想像さえしていなかったのです。地上に再生

する前は、霊媒としての役目を果たそうと悲壮な決意をしていたのに、肉体を持ってからは、そのことを部分的にさえ思い出すことがなかったのです。肉体に宿るまでの「霊的意識」と、誕生後の「肉体意識」は、これほどまでに違うということなのです。

この辺りの事情は、ハリー・エドワーズにおいても同様です。彼も霊界では、「ヒーラーとして、スピリチュアリズムのために貢献しよう」と決心していたはずなのに、肉体を持ってからは、それを全く思い出すことがなかったということです。それどころか彼も、スピリチュアリズムに対してむしろ反発心を感じていました。そしてスピリチュアリズムとはまるで関係のない、政治の世界に意欲を持ち、国会議員の選挙にも出馬しているのです。そのハリー・エドワーズも時至り、40歳を過ぎて突如、ヒーラーとしての霊的能力が開眼し、霊界で決意していた人生を歩み出すようになったのです。

肉体をまとった地上人は、普通、肉体意識しか自覚することができません。霊界での意識を思い出すことは、ほとんどありません。バーバネルほどの霊媒者であっても、霊界での意識を全く思い出すことがなかったという事実は、地上人の「霊的意識」が、いかに強烈に肉体の壁の中に閉じ込められているかということを示しています。人によっては時に霊的意識を部分的に思い出すことはありますが、それはきわめて稀なことなのです。

今このニューズレターを読んでくださっている大半の方々も、おそらく霊界で、「スピリチュアリズムと係わりを持つ」という明確な決意をして地上に再生したのではないでしょう。



「守護霊」が必要な理由

こうした事情があるために、私達一人一人に「守護霊」が付くこととなります。霊界での決意や打ち合わせの内容を逐一知っている守護霊が、私達地上人の分身として常に寄り添い、私達の意識の中に「インスピレーション」として「霊的意識」を吹き込み、導きをしてくれることとなります。守護霊の導きによって、再生前に選択した地上人生の方向に、無意識のうちに近づいていくように仕向けられます。

地上人は、自分自身の判断で自らの人生を選択してきたように思っていますが、実際はこうした形で、霊界から導かれて地上人生を歩んできたのです。皆さん方も、地上に生まれて今日に至るまで「守護霊」に導かれ、スピリチュアリズムとの出会いを得ることができたのです。

私達が地上でスピリチュアリズムにたどり着いたということは、霊界からの導きが成功したことを意味しています。私達を背後から導いてきた守護霊にとって、これまでの苦労が確かな実を結び、再生前に霊界で交わした約束が達成されたこととなります。守護霊にとって、これほどの喜びはありません。と同時に、私達にとっても、地上人として最高に幸運な人生をたどってきたということになるのです。

しかし、守護霊の導きが成功することがある一方で、当然のこととして多くの失敗も存在します。地上人類救済のために大きな使命を担って自ら再生を希望した高級霊が、肉体をまとうことによって「霊的感覚」が鈍り、物質的な欲望・煩惱に負けて道を外れることもあります。そして霊界での約束から大きく逸脱し、地上に再生したことの意味を失ってしまうのです。そうした霊の死後の後悔と苦痛は、当然大変なものになります。そして必死に導いてきた守護霊の努力も、すべて無駄になってしまうのです。



2 || 霊的視野を持つとは

「霊的真理」から得られる3つの宝

現在、地球に対する霊界からの働きかけは、さまざまな形をとって、ありとあらゆる分野に向けて進められています。その最終目標とするところは、言うまでもなく——「地上世界に霊的真理を広める」という点に置かれています。

その意味で今、私達がシルバーバーチやインペレーターなどの高級霊によってもたらされた霊的真理を受け入れることができたということは、地上人類の中で、最も恵まれた立場にいるということになります。底辺の広いスピリチュアリズムの中で、まさに頂点に立っているということなのです。

霊的真理を手にした私達は、地上世界における「最高次元の霊的宝」を得ていることとなりますが、その霊的宝とは、一言で言えば「魂の成長と救い」ということです。

さてその霊的宝は、「3つの霊的恩恵」として見ることもできます。1つ目の霊的恩恵は、これまで地上人類が知ることのなかった「新しい霊的知識」を手にすることができたということです。2つ目は、「新しい霊的視野・霊的視点」を得ることができたということです。私達を取り巻くさまざまな問題、また人生上の悩みなどに対して、これまでとは全く異なる高次元の視野から見ていくことができるようになったのです。3つ目は、「霊的成長のための実践的知識」を手にすることができたということです。地上人生の最大の目的である霊的成長（魂の成長）のために、具体的に何をなすべきかということを確認に知ることができるようになったのです。

私達はスピリチュアリズムによって、こうした素晴らしい霊的宝を得ることになりました。私達スピリチュアリストは——「新しい霊的知識」「新しい霊的視野」「霊的成長のための実践的知識」という3つの霊的宝を、他の地上人に先駆けて与えられたのです。

地上人に「靈的視野」を持たせることが、スピリチュアリズムの一つの目的

2つ目の靈的宝である「新しい靈的視野」とは「靈的真理に立った考え方・見方・判断をする」ということです。それによって、これまで地上という物質世界を物質的視点だけで眺めていたレベルを抜け出て、物質世界を靈的視野から眺めることができるようになります。シルバーバーチは、こうした「靈的視野」を地上人にもたすことが、自分達の目的でもあると言っています。

物質の中に閉じ込められている皆さんにとって、靈的実在を原理とした物の考え方をするのが難しいものであることは、わたしもよく知っております。しかし、そういう考え方をお教えるのが、わたしたちがこうして地上へ戻ってきたそもそもの目的なのです。皆さんが人生を正しい視野、正しい焦点でとらえてくださるように導くことです。

(シルバーバーチ・道しるべ・99)

シルバーバーチに言わせれば、地上人の大半が、人生を正しい視野・正しい焦点でとらえていないということになります。大半の地上人が、間違った考え方で、毎日を過ごしているということなのです。

靈的視野を持つとは、自分の考えを「靈的真理」に添わせること

先程、地上に生まれる前と後では、バーバネルの意識に、いかに大きな隔りがあるかを述べました。肉体を持った人間の靈的意識は、まるで牢獄の中に閉じ込められたような状態に置かれており、普通は全くと言ってよいほどそれを自覚することはありません。

靈的視野を持つとは、別の言い方をすれば——「靈界の人々が地上世界や地上人を眺めるのと同じように見る」ということです。肉体を持ちなが

らも、靈界の人々と同じような見方・考え方をすることなのです。したがって靈的視野を持つための努力とは、靈界人にならって、通常の自分の見方・考え方を切り換えて、靈的なものにしていくということになります。

しかし肉体を持ち、靈的感覚の失われてしまった私達にとって、果たしてそうしたことは可能なのでしょうか？ 靈性の鈍くなってしまう私達には、とてもできそうにないことのように思われます。ところが「靈的真理」を持っているということが、それを可能にするのです。

靈的真理とは、純粋な靈的視点そのものです。靈界にいる高級靈の視点が、取りも直さず靈的真理として語られているのです。したがって靈的真理に添って自分の考えを変える努力をすることによって、高級靈と同じ「靈的視野」が持てるようになるのです。

もちろん、そのためには大変な努力が要求されます。絶えず靈的真理を思い出し、それに一致させようとする意識的な努力が必要となります。そうしない限り、いつまでたっても肉体的な視野・物質的な視野から抜け出すことはできません。靈的真理を知らない人々と同じような視野しか持つことができません。



靈的視野を持つと努めることは、最高次元の靈主肉従の実践

靈的成長のための実践の第一歩は、物質・肉体に翻弄ほんろうされないようにすることです。すなわち「靈主肉従」という自己コントロールから始まります。シルバーパーチは自己コントロールについて——「地上人は、動物性の名残と神性という相反する2つの要素を内在させています。靈的成長とは、動物性の名残（利己的本能）を抑え、神性をより多く発揮できるようにすることです」と述べています。

スピリチュアリズムの実践の第一歩は、この「靈的な自己コントロール」の闘いから始まります。この闘いに勝ち、自分自身が物質に翻弄されない存在となって、初めて靈的成長が可能となります。スピリチュアリズムではこのように、まず自分自身を修めることが真っ先に求められるのです。従来多くの宗教と同様、スピリチュアリズムは、自己コントロールを信仰実践の出発点としています。

ところで「靈的な自己コントロール」、すなわち「靈主肉従の内面的闘い」にも、いろいろな段階があるということを知っておく必要があります。低い次元の靈主肉従から、高い次元の靈主肉従があるということです。初歩的な靈主肉従の段階は、物質欲・肉体本能の放縱にストップをかけるということです。具体的には、質素な生活・節度ある生活を心がけるということです。

そして靈主肉従の最も高次元のものが、考え・思考そのものを、すべて靈的な観点からなすようにするということです。純粹な靈的思考ができるようにすることです。そしてこれが、まさに「靈的視野を持つ」ということなのです。靈界人のように地上世界の出来事を眺められるようになるということです。

こうした靈的視野を持つためには、当然のこととして、自分の内部の靈的狀態が高まっていることが必要とされます。すなわち「初歩的な靈主肉従」がしっかりなされていることが不可欠な条件となります。基本的な靈主肉従が確立した上で、初めて靈的視野という「高次元の靈主肉従」が可能となります。

靈的視野によって、心が広くなり「靈的樂天性」が身につく

靈的視野で見るとは、地上世界の出来事を一步高いところから見下ろし、より広範で高次元の判断をすることです。当然、一般の地上人とは全く異なる判断をすることになります。それは別の言葉で言えば、地上人でありながら、地上人の物質的視点を超えることです。実はこれは、従来宗教で言われてきた「大きな悟り」の世界に至るのと同じことなのです。もっとも高級靈のレベルから見れば、その程度の悟りは靈界での常識ということになりますが……。

そうした高く広い視野を持つことによって、地上世界の出来事に振り回されたり、翻弄されることがなくなります。毎日毎日の出来事に、右往左往することなく、常にゆったりと、どっしりと臨むことができるようになります。心に深い安らぎと平安を宿すことができ、「靈的樂天性」という人徳を身につけることができるようになるのです。靈的視野を持つことによって、最高のポジティブ・シンキングが可能となるのです。

いかなる問題においても、私たちは決して地上的観点から物ごとを見ないということ、地上的尺度で判断しないということ、人間的な憎しみや激情には絶対に巻き込まれないということ、往々にして人間の判断力を曇らせている近視眼的無分別に振り回されることはないということを忘れないでください。

(シルバーパーチ7・59)



靈的視野を身につけることは、本当のスピリチュアルな能力を持つこと、この世の靈能者以上の力を持つこと

靈的視野を持つということは、単なる靈体の持つ能力（靈能力・サイキック能力）を超えたスピリチュアル・レベルの能力を身につけることを意味します。靈の姿を見たり、靈の声を聞くといったサイキック能力を発揮することができる靈能者は多くいます。しかしそうした靈能者の中で、高級靈と同じような視点で、地上世界の出来事を眺めることができる者はめったにいません。

これまでの人類史上、卓越したサイキック能力と、高次のスピリチュアル能力をともに備えた人間としてイエスを挙げることができますが、これは例外中の例外と言えます。肉体を持ちながらも高次の靈的視野を持つことができた人間は、地球人類の歴史の中で、イエスをおいて他にはいなかったのです。

この世には目を見張るような靈能力を発揮することができる人間がありますが、私達はスピリチュアリズムによってもたらされた「靈的真理」を活用することにより、彼ら以上の高い靈的能力を持つことが許されているのです。靈的真理を知ることによって、私達はどんな靈能者よりも高いスピリチュアルな能力を身につけることができます。靈界の高級靈と同じように、永遠の観点から日常の出来事を眺めることができる、価値ある靈的能力が与えられるようになるのです。

そして、そうした高い心境を持つことによって、靈界にいる多くの靈達の協力・応援を引き出すことができるようになるのです。



3 || 靈的視野の習慣化・定着を目指して——日常の意識的努力が不可欠

先に述べたようにシルバーバーチは、地上人が靈的視野を持てるようにすることが、自分達が地上にきた目的であると言っています。したがって靈的視野を身につけることは、私達スピリチュアリストにとっての明確な目標となります。靈的視野を身につけるということは、天から与えられた「靈的真理」という宝を、正しく活用し、実践することでもあります。

靈的視野は、語学や新しい技術を習得するように、努力によって少しずつ身につけていくものです。意識しなければ、いつの間にか物質的視野に戻り、すっかりこの世の人々と同じレベルにまで下がってしまいます。したがって靈的視野を身につけるためには、初めは「意識的に靈的真理を思い出す」ことが必要となります。絶えず一人の時間をつくり、靈的真理を思い出し、心の持ち方を正していく作業を繰り返さなければなりません。心の切り換えは、初めはとても難しいことですが、努力を継続する中で徐々に身につけていきます。それにともない日常生活においても、自然に靈的視野に基づく考え方ができるようになっていきます。やがて靈的視野が習慣化し、意識の中心に定着するようになります。

このように最初は、意識的に靈的視野を思い出したり、心を切り換える努力をしなければなりません。頭で分かっているけど心がしっくりしない、実感が湧かないといったことは初期の段階では普通です。心もなかなか広がりません。そんな時こそ率直に、「神に助力を祈る」ことが必要です。まさに神に祈る好機なのです。そうした祈りは、地上人の靈的成長を心から願ってくれている守護靈にとって、とてもうれしいことであり、必ず全力で手助けしてくれるはずです。

一人になって目を閉じ祈ります——「神様、私に靈的エネルギーを与えてください。私の心にエネル

ギーを注ぎ込んでください。そして靈的視野が実感できるようにしてください。」5～10分、じっとして靈界からのエネルギーを取り入れるのです。すると自然と不思議な心の安らぎが訪れるようになります。心が明るくなり、力が湧き、頭がすっきりして視界が広がります。すぐそこに靈界があることを、生き生きと感じられるようになります。そしていつの間にか、靈的視野からの見方ができるようになっていることに気がつくはずです。

こうして守護靈の助けを得ながら、「靈的視野」が実感的なものとして身につくようになっていきます。靈的視野が自分のものになるにつれ、日常の出来事に心が乱されることがなくなり、常に安定した心境を保てるようになります。日々の努力を通じて、靈的視野から物事を眺められるようになったとき、自らの靈的成長を自覚することになるでしょう。



4 || 靈的視野の実際 ——靈的視点を身につける ための実例

次にさまざまなケースごとに、「靈的視野」の実際を見ていくことにしましょう。ここに挙げた実例を、靈的視野を身につけるための練習材料として、また自分の心を整理するための現実の手助けとして、あるいは皆さん方の祈りの言葉として活用してみてください。

靈界と靈達を、靈的視野から見ましょう

——今、皆さん方は、どのような場所にいるでしょうか。自宅の部屋の中でしょうか。会社のオフィスでしょうか。あるいは雑踏の中、通勤電車の中でしょうか。どのような場所であっても、その場から、靈界と靈界人に思いを馳せることにしましょう。

今、私達の目に映るのは物質世界だけです。しかし実際は、その背後に「靈界」があります。現実はこの場に、靈界が展開しています。それを意識してみましよう。目に見える物質世界だけでなく、靈界を心の中に思い描いてみましよう。私達は今、2つの世界に同時に身を置いています。

今、私達の眼前に広がる靈界には多くの靈達がいまいます。そして私達のすぐ後ろには守護靈がいまいます。守護靈はいつも、私達一人一人を導き守ってくれています。その「守護靈」の存在を心の中に感じてみましよう。私達の行動と心のすべては、守護靈に知られています。一切の隠し事はできません。ですから裸になって正直に、守護靈に対しましよう。



〈祈り〉

たとえ肉体を持った私であっても、常に霊界があることを意識できますように……。物質的なものに心を奪われないように、霊的視野を与えてください。いつも私を導き守ってくださっている守護の霊に、心から感謝いたします。

——今度は霊界全体に目を転じてみましょう。

霊界には、地上人類を救うためのスピリチュアリズムの大霊団が組織されていて、地球に向けて働きかけをしています。地球圏霊界のすみずみまで霊達が配属されています。今この時も、世界各地で昼夜を問わず、スピリチュアリズム普及のために働きかけています。私達の背後にも、多くの霊達が連なって応援しています。

〈祈り〉

私も、霊界の高級霊の方々と同じスピリチュアリズムの一員として、自分の人生を捧げたいと思います。どうか私の人生を、霊界の方々の道具として用いてください。

神を、霊的視野から見ましょう

——物質世界と霊界と霊界人の3つが、同時に心に感じられるようになったら、さらに意識を拡大し、神に思いを馳せることにしましょう。

地上世界・霊界のすべてが、神の霊に包まれています。私達の心、私達の体は神の霊に満たされ、包まれています。神の霊の大海の中に、私達も、物質世界も霊界も霊達も浸っています。

私達は神の分霊であり、神から生まれました。だから神は私達の「霊の親」、私達は神の「霊の子供」です。そして私達一人一人は、今、神から最高の愛で愛されています。神は法則によって世界と人間を支配していますが、その法則の背後には「神の慈悲」が存在しています。神は私達に直接、姿を顕すことはありませんが、私達は常に、神によって愛されているのです。

〈祈り〉

神様、私はあなたを信じます。私のすべてを、あなたに委ねます。あなたによって愛されていることは、私にとって最高の喜びです。あなたの子供であることに、感謝いたします。



地上世界・地球を、靈的視野から見ましょう

——靈界と神が意識できるようになったら、次は目の前に存在する物質世界・地球を眺めることにしましょう。

眼前に広がる物質世界は、靈界での生活に備えて造られた“訓練の場所”です。わずか100年にも満たない短い地球上での生活で、いろいろな体験をして魂（心）を鍛え、成長させるために私達は生まれてきました。今、私達は魂を成長させるために、地球という物質世界に生きているのです。

その地球は多くの惑星の中で、靈的にきわめて低い場所です。「物質主義と利己主義」だけに支配され、神の愛も光も届かない暗黒の世界になっています。そのため多くの人々が、本来必要のない苦しみを味わっています。しかしその暗黒の地球にも、高級靈によって少しずつ光が射し込まれ、徐々により良い訓練場になりつつあります。

私達は暗黒の地球にあって、幸いにもスピリチュアリズムと出会い、直接、靈的光を受けられる恵まれた立場に立っています。地上人として「最高の恩恵」に浴しているのです。

<祈り>

神様、私に最高の地上人生を与えてくださって、ありがとうございます。私の一生を、スピリチュアリズム普及のため、人類の救いのために捧げます。

地球上の出来事・ニュースを、靈的視野から見ましょう

——地球上で毎日起こっている、さまざまな事件・ニュースに目を向けてみましょう。大半の地上人は、そうした出来事に右往左往し、不安を募らせ、無用な心配・恐怖にとらわれています。

地球上の悲惨な事件・ニュースは、すべて地上人類を支配している「物質主義と利己主義」から生じています。でもそれを、私達が心配したり恐れしたりする必要はありません。靈界からの働きかけによって、徐々にではあっても確実に、地球は良い方向に向かっています。

靈界の高級靈達がすべて良きように計らってくださっている以上、私達が将来を憂える必要などありません。私達スピリチュアリストは「靈界の道具」として精いっぱい、スピリチュアリズム普及のためにお手伝いしていけばよいのです。それがベストの生き方なのです。

<祈り>

神様、一刻も早く、地上での醜い争い・^{だま}騙し合い・奪い合い・人や動物への虐待がなくなりますように……。

私は地上の出来事に心を乱すことなく、あなたと高級靈の方々の導きを信じます。そして、いつかその努力が実って、地球上に天国が到来することを信じます。



家族を、靈的視野から見ましょう

——次に、地球上の人間関係に意識を向けてみましょう。まず、皆さん方の家族を見てみましょう。家族（家庭）は大半の地上人にとって、心の拠りどころであり、最も大きな慰めの場所となっています。これをどのように見つめるべきでしょうか。

私達の家族の一人一人は、靈的成長を目指して、この地球に生まれてきました。彼らは私達の家族であるより先に、「神の靈的子供」なのです。そして家族のそれぞれに、彼らを導く「守護靈」が付いています。同じ家族であっても靈的成長のレベルは異なり、各自が自分の成長に責任を持って地上人生を生きていかなければなりません。一人一人が皆、靈的成長のための厳しい訓練の道を歩む等しい神の子供なのです。

家庭は人間にとって優れた“愛の訓練場所”ですが、そこで育まれる愛のほとんどは、靈的なものではありません。家族への愛よりもっと価値ある愛は、血縁関係のない人々へ向けての愛です。多くの人々の靈的救いのために働くことこそ、より次元の高い愛の行為なのです。家族愛より「靈的奉仕」の方が、はるかに価値があるのです。

<祈り>

神様、縁あって地上で家族となった者達が、どうか地上人生を有意義に過ごし、靈的成長をなせますように……。

そして自分の意識が家庭を超えて、より広い人類の幸福へと向かいますように……。常に私の心に、家族よりもあなたと全人類への愛が強く宿りますようにお導きください。

まわりの人々を、靈的視野から見ましょう

——家族という身近な人間関係から目を広げ、まわりにいる人々を眺めてみましょう。私達のまわりにはさまざまな人々がいます。背中の曲がった老人がいます。茶髪の青年もいます。会社員風の男性、セーラー服を着た女子高校生も見えます。金持ち風の男性が高級車に乗っています。公園のベンチには、みずぼらしいホームレスの男性の姿が見えます。

まわりの人々の、外見に惑わされてはなりません。すべての人々は、魂を成長させるために地球に生まれてきたのです。しかし大半の人々は地上かぎりの楽しみや喜びを求め、かけがえのない人生を、全く無駄なことだけに費やしています。

彼らが「靈的真理」を知らず、物質的な満足だけを追い求めているのは、何と気の毒なことでしょうか。死ねば素晴らしい靈界に行けることを知らず、死を恐れているのは、何と哀れなことでしょうか。

<祈り>

神様、今、私の目の前にいる人々が一刻も早く靈的真理を受け入れ、靈的人生を歩み出すことができますように……。せつかくの地上人生を、はかない物質欲だけにとらわれて無駄に終えることがないようにお導きください。



——道を歩くと、ブラジル人らしい若者のグループが見えます。またテレビのスイッチを入れると、画面には世界各国の人々の姿が映し出されています。

この人々も皆、私達と同じ「神の子供」です。彼らも魂を成長させるために地球に生まれてきました。そして自分にふさわしい環境として、今の人種・国・性別を選んだのです。彼らは、神の子供であり、私達とは「靈的兄弟姉妹」なのです。

〈祈り〉

神様、地球上に生を享けたすべての人々が、あなたの本当の子供として靈的成長の道歩むことができますように……。異なる人種・民族のすべての人々が、私の靈的兄弟姉妹であることを深く実感させてください。

——物質主義と利己主義の支配するこの地球上には、肉体を維持するための最低条件（食料・衣類・住まい）さえも保証されない気の毒な人々が大勢います。食べる物にも事欠く悲惨な状況の中で、靈的なことなど到底考えられない哀れな人々がたくさんいます。

地上に生を享けた人々は皆、地上生活を通じて靈的成長をなすために生きています。それが地球全体の未熟さのために犠牲となり、靈の道具である肉体さえも維持することができなくなるといのは、本当に悲惨なことです。今後、何百年をへて地球が靈的に進化した暁には、こうした人々は、地球上には存在しなくなるはずで

す。しかし21世紀の現代では、地球はまだそこまで進化していないために、多くの哀れな犠牲者達を生み出しています。地球人類全体の未熟さのために犠牲となった人々は、靈界において埋め合わせの道を歩むことになり、永い視点から見れば、決して不公平な扱いを受けることはありません。しかし現在の地球上においては、彼らは最も不幸な人々なのです。

〈祈り〉

神様、どうか最も恵まれない地上の仲間達に、生命をつなぐ最低限の保証が与えられますように……。今、地上人生において最低のものさえ得られずに死んでいく哀れな兄弟姉妹達には、靈界での幸福と、今後の靈的成長の道が約束されますように……。

そして地球全体が進化して、一刻も早く、こうした哀れな人々を生み出すことのない惑星に至ることができますようにお導きください。

自分自身のことを、靈的視野から見ましょう

——ここで目を転じ、今度は、自分自身のことを靈的視野から見ることにしましょう。

私達は、魂を成長させるために地上に生まれてきました。肉体は、地上で魂を成長させるのに必要な道具のようなものです。道具（肉体）は死とともに朽ち果て、土に戻りますが、私達の魂は、死後も靈界で永遠に生き続けます。

靈界こそが、私達の本来の世界であり、今は一時、物質世界ならではの体験を求めて、この地上に立ち寄っているのです。不自由な道具をまもって生きる地上は厳しい靈的修行の場ですが、その地上生活の間中、私達には「守護靈」が付き添い、守り導いてくれています。

〈祈り〉

神様、私の人生は、人々への奉仕と自分の靈的成長をなすためだけにあることを、強く自覚させてください。物欲に惑わされ、本能の放縦に流されることがないように、私を高めてください。もっともっと清い世界を求め、力を、どうかお与えください。

自分の人生とライフワークを、靈的視野から見ましょう

——私達は、何のために生きているのでしょうか。大半の人々が人生に確かな目的を見い出せないまま空しく時を過ごし、死んでいきます。自分の一生を懸けて追い求めていく目標を持った人々は、ほとんどいません。

それは物質世界だけがすべてだと思い、人生を永遠の尺度から考えられないからです。

私達は「靈界の道具」として、スピリチュアリズムのために働くことを決意し、自ら願って地上に生まれました。私達の地上人生は、靈界の人々の地上人類救済活動に協力するためにあるのです。私達を通じて、一人でも多くの人々が「靈的真理」に出会うことが、私達の本来の願いでした。それを思えば、真理普及と関係のないどちらでもいいことに、自分の人生を費やしてはならないはずです。

これからの私達の人生を、すべて神と靈界に捧げ、「良き靈界の道具」として奉仕の道を歩んでいきましょう。

〈祈り〉

神様、私の人生を、すべてあなたの道具として捧げます。この世の物質的利益や名声は、何も求めません。私の唯一の願いは、この地上人生を終えたときに——“お前はすべてを人類のために捧げた、良き神の道具であった”という、あなたからの評価をいただくことだけです。どうぞ、私のすべてをあなたの道具として存分にお使いください。



苦しみ・困難を、靈的視野から見ましょう

——地上人生では、苦しみ・困難との遭遇は避けられません。次々と苦しみや困難が生じてきます。それはこの地上は、苦しみを体験する中で靈的成長をなすための“訓練場所”として造られているからです。

大半の人々は、何とか苦しみから逃げることをだけ考えますが、同じ苦しみ・困難も、靈的視野から見れば小さなものとなります。そうした苦しみ・困難への対処こそ、まさにスピリチュアリストならではの努力なのです。

すべての苦しみ・困難は、自分の靈的成長を促すものとして生じてきます。物質次元にとらわれなければ、教訓を学び、靈的成長の糧とすることが出来るものです。正しい考え方をもって臨めば、地上の苦しみはすべて良いものとなるのです。その地上の苦しみは、一時的なものであり、いつまでも続くわけではありません。

また私達には、靈界の靈達（守護靈）という最強の味方・真の理解者がいます。靈界の人々が私達の人生をすべて良きように計らってくださる以上、その導きを信じるべきです。私達にとって、最も良い道が示されるのです。ですから自分なりにあがいたり、余分な心配や取り越し苦労をしないようにしましょう。いたずらに心配し、恐れや不安を募らせ苦しむのは、靈界の人々の導きを忘れているか、信じていないからです。それは自分の未熟さであり、靈性の鈍さに他なりません。

地上では、とかく人目を気にするところから苦しみが生じますが、靈的真理を知った者は、人の目より「神の目」を気にしなければなりません。自分に対するまわりの人々の評価は、気にする必要はないのです。今、自分が神の前に正しく立ち、心を高める努力をしているかどうかだけが問題なのです。

〈祈り〉

神様、いつの間にか物質次元の意識にとられ、あなたの存在と霊界の事実を忘れていました。そして、どちらでもいいような地上の出来事に心を奪われ、取り越し苦労をしていました。あなたが愛してくださっていること、そして常に霊界の方々が最大の導きをしてくださっていること、そのため何一つ心配する必要はなかったことを忘れていました。

神様、いつもあなたのことを強く思い、霊界の方々の導きを実感し、地上世界の出来事に超然とできるような広い視野を、私にお与えください。自分のことで悩み、エネルギーを費やすのではなく、人々への奉仕のために、すべてのエネルギーを傾けることができますように……。

地上の出来事は決して大きなものではないことを、自分の生き方を通じて、まわりの人々に示すことができますよう、どうか力をお与えください。

寂しさ・孤独を、霊的視野から見ましよう

——人間にとっての最大の苦しみは、誰からも愛されていないという寂しさ・孤独です。人はこの寂しさ・孤独から逃れるために、刹那的刺激や本能的快楽を追い求めます。他人とのお喋りやペットによって自分を慰めたり、趣味や娯楽で気を紛らわせようとしています。

私達スピリチュアリストにとっても、寂しさ・孤独を乗り越えることは容易ではありません。それはまさに地上世界ならではの修行の現場であり、「霊的真理」を本当に活用する時なのです。

今、私達一人一人は、地上のどんな人間（両親・家族）よりも深い愛で、「神と守護霊」から愛されています。私達が今、寂しさを感じているのは、日常生活の忙しさの中で、その一番肝心なことをすっ

かり忘れていたからです。私達は、決して独りぼっちではありません。いつも神と守護霊と一緒にです。

神と守護霊から「最高の利他愛」で愛されている私達は、何と幸せな人間なのでしょう。それなのにその事実を忘れ、寂しくなって、いつの間にか自分と同じ不完全な人間から、愛されたいと考えていたのです。

今すぐ「神と守護霊」に意識を向け、その愛を思い起こし、霊的エネルギーをもらうことにしましょう。守護霊から与えられる霊的エネルギーによって、私達の心は満たされ、元気が湧いてくるはずですよ。

〈祈り〉

神様、あなたと霊界の方々から、真実の愛で愛されている私は、本当に幸せ者です。できることならばその愛を、もっともっと強く実感させてください。そして他の人から愛されることを期待するのではなく、自分が先に愛することができる強い人間になれますように……。

霊界の方々が地上人を愛するように、いつも明るい“愛の灯台”となれますようにお導きください。



死を迎える人を、靈的視野から見ましょう

——地上人にとって、“死”は避けられない宿命です。誰もが何十年か後には、必ず死に直面しなければなりません。一般の人々にとって、死は最大の不幸であり、最も悲しい出来事です。そして多くの人々が、何とか少しでも先に延ばしたいと思っています。

しかしスピリチュアリズムでは“死”について、180度異なる考え方をします。

死は素晴らしい再出発の時であり、楽しみに待ち望むべき喜びの時です。もうすぐ死を迎え、靈界に戻ろうとする人は、病気の苦しみや肉体の重さから解放され、素晴らしい出発をしようとしています。間違いなく、地上人生よりずっと幸せな生活が待っています。そうした新しい門出を迎えた人には、祝福の言葉を贈るべきなのです。

<祈り>

神様、今、靈界に旅立とうとするこの人が、死を自覚し、靈界での環境に早く慣れますように……。靈界の人々の迎えに、素直に従うことができますようにお導きください。

自分の死を、靈的視野から見ましょう

——最後に、自分の死について考えてみましょう。いつ死を迎えてもよいように、「靈的真理」に照らし合わせて、心の準備をしておく必要があります。

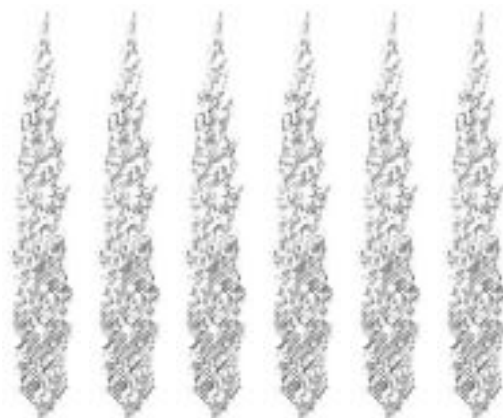
私達自身が重病で“死”を避けられない状況のときは、靈的真理で心を整理し、靈界に思いを馳せ、死の訪れを静かに待ちましょう。死の直後には、あの世にいる家族や親しい人達が出迎えてくれるはず。その人達との再会を心待ちにして、喜びに胸をふくらませましょう。

<祈り>

神様、私はもうすぐ地上人生を終わろうとしています。私は短い地上人生の中でスピリチュアリズムと出会い、スピリチュアリズムのために働くという、幸せな人生を送ることができました。まだまだやりたいことがたくさんありますが、それは他の多くの人々が、代わってやってくれるものと信じています。

私は靈界に行っても引き続き、靈界の方々とともに、スピリチュアリズム普及のために働きたいと思います。すべてをあなたに委ねますから、どうか靈界でも、スピリチュアリズムのために貢献する道を、私にお与えください。

神様、これまでのあなたの導きに、心から感謝いたします。



スピリチュアリズムから見た TM瞑想と伝導瞑想

スピリチュアリズムでは、祈りや瞑想を、とても重要なものと考えています。物質世界での忙しい歩みの中で、私達の心は自然と「肉主霊従」に陥ってしましますが、祈りや瞑想は、下がってしまった心を強力に「霊主肉従」の状態に引き上げてくれます。祈りや瞑想を通して、私達は神からの霊的エネルギーを取り入れることができます。それによって高いレベルに心を保ち、日頃から私達を導いてくれている背後の霊達との関係を密接にすることができるようになります。こうした霊的效果があるため、高級霊は私達地上人に、一日わずかな時間でもよいから祈りの時を持つように繰り返し述べているのです。（*スピリチュアリズムにおける祈りや瞑想については、ニューズレター4号ですでに詳しく説明していますので、ここでは省略します。）

時々、「瞑想にはさまざまな種類がありますが、その中でどれを選んだらよいのでしょうか」という質問を受けることがあります。

それについてシルバーパーチは——「物的混沌から抜け出させ、霊的静寂の中へと導くことを主眼としておりますが、私はどれとって特定の方法を説くことには賛成しかねます。各自が自分なりの方法を自分で見出し、いくべきものだからです」（シルバーパーチ1・155）と言っています。

要するに、各自が自分に合った瞑想法を探せばよいということです。霊的意識を取り戻し、霊的意識を引き上げる効果が得られるならば、どのような方法であっても構わないということです。

さてここでは、禪（ゼン・メディテーション）と並んで、世界的によく知られている2つの瞑想法（TM瞑想と伝導瞑想）を取り上げ、スピリチュアリズムの観点から検討してみることにします。

1 || TM瞑想 （トランセンデンタル・ メディテーション）

シンプルで効果の高い優れた瞑想法

TM瞑想は、日本語では「超越瞑想」と訳されます。これは古代インドのヒンドゥー教の聖典を、物理学者で哲学者である、マハリシ・マヘーシ・ヨーギが、現代社会に合った形で復興させたものです。TM瞑想の方法は実に簡単で、教師がヴェーダ経典の中から選んだその人向けの「マントラ（真言）」を、心の中で15～20分（1日2回）唱えるだけのことです。たったこれだけのことですが、それによってさまざまな効果をもたらされるのです。

しかもその効果は、現代科学によって確かめられています。ストレス解消や不安感の減少といった心理的效果や、新陳代謝率のアップ・不眠症からの解放・血中乳酸塩の低下・高血圧の正常化といった生理的效果が確認されています。また職場の雰囲気改善や、従業員の仕事に対する満足度の向上といった行動面への効果も認められています。TMでは実際にこうした多くの効果をもたらされるため、現在、企業の中にはTMを導入するところが現れています。

その他、TMの評価できる点は、新興宗教のような強引な勧誘をしないということです。TMには、新興宗教的な狂信性・宗教臭がありません。スピリチュアリズムから見たとき、TMはグループとしての在り方や瞑想効果という点で、一定の評価を下すことができます。スピリチュアリズムと共存することができる数少ない組織・グループと言えます。

誇大に宣伝され過ぎる TM 効果

このように TM については、スピリチュアリズムの立場からも評価すべきいくつかの点があります。しかし TM 独自のものとして PR される心理的効果や生理的効果は、何も TM だけに限られるものではありません。TM 以外の多くの瞑想法においても、同様の効果が実際に確かめられています。TM では 500 に上る研究調査によって、TM 瞑想の独自の効果は立証済みだと言っていますが、比較研究の完全な情報が提示されているわけではないため、TM サイドの見解を、そのまま鵜呑みにすることはできません。

また TM では、瞑想が進んだ段階で、フライング（*空中へのジャンピングや浮遊）という現象が起こることが知られています。かつてはこれが、TM の優秀性と独自性を示すものとして PR されたことがありました。しかしこうした現象も、TM だけに見られる独自のものではありません。ましてやそれによって、TM の優秀性が証明されることにはなりません。

こうしたフライング現象・人体浮遊現象は、かつてのスピリチュアリズム（* 20 世紀初期の心霊科学研究の時代）にも頻繁に見られました。スピリチュアリズムの観点からすれば、これはサイキック・レベルの心霊現象の一つに過ぎません。何より重要なことは、そうしたサイキック現象を引き起こす能力は、その人物の霊的成長・霊性のレベルとは無関係であるということです。

TM の 1% 効果は、事実ではない

TM では、TM 瞑想の実践者が都市人口の 1% を超えると、人々の精神状況に変化が生じ、社会環境が改善され、犯罪も減少することになると言っています。これを彼らは「1% 効果」と呼んでいます。彼らはこの 1% 効果は、大規模な科学的調査結果によって証明された事実であるとしています。しかし彼らが証拠として挙げるデータは、どこまでも TM サイドで大量に製作されたものに過ぎません。事情は分かりませんが、最近ではこの 1% 効果は、以前ほど盛んには PR されなくなっています。

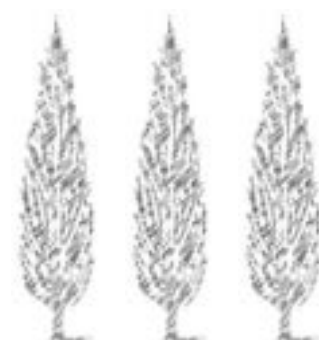
スピリチュアリズムの観点からすれば、1% 効果

は明らかに誇大宣伝としか言いようがありません。あるいは TM に潜む盲信的要素が表面化したと言ふべきかも知れません。地上世界は、一定の霊的レベルに至った人が「霊的真理」と出会い、それを実践に移すことによって徐々に霊的浄化が進むようになっています。すなわち真のスピリチュアリズムが、一人また一人と増えることによって、「地球の霊的浄化」が進展していくのです。TM の言う 1% 効果は事実ではありません。

なぜ TM のマントラでなければならないのか？

TM に対しては、次のような疑問もあります。なぜヴェーダ経典から選んだマントラでなければならないのか、どうしてそれを他人に口外してはならないのか、ということです。それについて納得のいく根拠が示されていません。TM では、TM のマントラは生命の成長を育む調和的な質を持った波動であり、その人個人に合った特定の音であるからとの説明をしていますが、それではあまりにも説得力がありません。

スピリチュアリズムの観点からすれば、何もマントラでなくとも能力を引き出す方法はいくらでもあるということです。TM の言うマントラでなくとも、他の方法によって同じ効果を引き出すことができるのです。TM のマントラは、単なるサイキックの手法の一つに過ぎません。



T Mの最大の問題点

——霊界と霊達の存在に対する無知

T Mにおける最大の問題点は、霊界と霊達の存在について全く無知であるということです。スピリチュアリズムでは、地上世界の背後には厳然として霊界が存在していること、そして霊界から絶えず地上に向けて影響が及ぼされていることを明らかにしています。私達地上人にとって、霊界と霊達の存在は絶対的なものなのです。

しかるにT Mでは、この重大な事柄についての理解・認識が、ごっそり抜け落ちています。これがT Mの決定的な思想的致命傷なのです。したがってT Mがどれだけ自らの正当性と優秀性を主張したとしても、片手落ちの思想・片端^{かたわ}の理論の域にとどまることになってしまうのです。

「創造神論」のスピリチュアリズムと、「汎神論」のT M——スピリチュアリズムとの本質的な神観の違い

霊界の存在を無視するという根本的な間違いを生じさせている原因は、マハリシが根拠としている古代ヒンドゥーの教えそれ自体にあります。霊界通信に根拠を置くスピリチュアリズムと、ヒンドゥーの教え（ウパニシャッド）に基づくT Mでは、「神観」において本質的な食い違いがあります。これについては先号のニューズレターでも触れましたが、もう一度取り上げることにします。

スピリチュアリズムでは、神（大霊）と人間を、「創造主」と「被造者」という関係としてとらえます。この点においては、スピリチュアリズムの神観は、ユダヤ教やキリスト教と同じ「創造神論」に立っています。神は、どこまでも宇宙の創造主であり、人間の間には明確な一線が引かれています。そして人間の霊魂は、神から生み出された分霊であり、それゆえミニチュアの神と表現されます。人間の霊魂は、永遠的な個別性を保つように造られており、しかも神と同じ要素からなる「神の子供」なのです。人間は、神から与えられた分霊を、種子の状態の内蔵させています。霊性の進化とは、その種子状態の「霊魂（ミニチュアの神）」を、努力によって少しずつ

成熟させ、神に似ていくプロセスに他なりません。人間は地上生活中も死後も、進化の道をたどっていきますが、それはどこまでも「親なる神」の霊性に似ていく歩みなのです。

したがって進化の暁に、神と一体融合化し、個別性を失うというようなことはありません。分霊としての個別性は、どこまでいっても保たれるのです。古代インド思想や神智学^{しんちがく}で言うニルバーナのような、神と融合一体化し、個性を失う世界に至ることは絶対にはないのです。

古代インド思想は、こうしたスピリチュアリズムの考えとは全く異なっています。神（ブラフマン）と人間との間に、創造主と被造者という一線を引きません。神と人間の関係を「汎神論的」にとらえ、人間を神の一部であると考えます。宇宙はたった一つの真の現実であるブラフマン（*T Mではこれを超越絶対存在と言ったり、永遠存在・純粹意識の存在と言っています）だけが存在するとし、自己と絶対存在（ブラフマン）との合体を完全に成し遂げることで、解脱^{げだつ}の瞬間を迎えるようになると考えます。古代インド宗教が理想として求めてきたブラフマンと合一した世界を、T Mでは、第4の意識の境地・意識の最高状態・宇宙意識と言っています。そしてこれは、現代物理学で言う“統一場”と同じであると主張するのです。



瞑想中に味わう「至福意識」について

このようにスピリチュアリズムとTMでは、神観において全く異なった考え方をします。この神観の違いが、瞑想中の「至福体験」に対する見解の違いを生み出すことにもなります。深い祈りや瞑想中には、たびたび霊的なエクスタシー状態を体験することがあります。そうした状態では、自分の身体がまるで宇宙の中に溶け込んでしまうような感覚に包まれます。

TMでは、第4の意識状態（純粹意識）に近づくにつれ、至福感覚が高まると説明しますが、これはスピリチュアリズムにおける至福体験と同じことを意味しています。すなわちTMの言う「至福意識」とは、スピリチュアリズムで言う「霊的なエクスタシー体験」と同じものなのです。しかしその等しい体験を、スピリチュアリズムとTMでは、全く異なるものとして解釈します。

スピリチュアリズムでは「至福体験」を、霊的意識の拡大による神（大霊）との接近状態、神と愛において深く結ばれた状態と考えます。実はこうしたことは、肉体の影響を一切受けない霊界においては、日常的に生じていることなのです。各霊の進化のレベルに応じて意識の度合いは異なりますが、地上人ではめったに味わえない至福意識の状態を、霊界人は絶えず体験しています。

一方、TMではそうした「至福体験」を、神（ブラフマン・一者）と合一・合体した瞬間ととらえます。スピリチュアリズムとTMの見解のどちらが正しいのかは、霊界の事実と照らし合わせれば明らかです。至福意識を体験している最中であっても、霊体が神と一つとなるという事実はありません。主観的にはまさに宇宙と一つとなり、神と一体となったかのような感覚を味わいますが、それはどこまでも主観的感覚であって、霊的な事実ではないのです。霊体という形態が消え失せ、神と融合してしまうようなことはありません。



睡眠中の体験に対する無知

またTMでは霊的世界の事実が分からないために、睡眠中の貴重な体験についても、その重要性を全く認識していません。私達は一人の例外もなく、睡眠中に霊体が肉体から離れ、霊界に赴いて死後に備えてさまざまな体験をしています。このように睡眠には、単に肉体を休める以上の大きな意味があるのです。

TMでは盛んに、睡眠とは異なる深いリラクゼーション効果が得られると宣伝しますが、それは睡眠の持つ重要性を知らないところから発する無知な判断に過ぎません。

祈り・瞑想の目的の一つは、背後の霊との絆を強化すること

地上人は絶えず霊界の守護霊による導きを受けているという重大な事実を、TMでは全く理解することができません。実は祈りや瞑想は、こうした霊達の存在を前提としないところでは成立しないものなのです。

スピリチュアリズムにおける祈りは、神に向けて発せられます。それが魂を神に近づけ、霊界の人々とのパイプを強め、霊達がより働きかけやすい状況をつくり出すこととなります。このように正しい祈りには、必ず霊界の霊達の反応がともなうようになっているのです。それによって私達地上人は、大きな導きを得られるようになるのです。スピリチュアリズムにおける祈り・瞑想は、常に背後にいる霊達の存在が前提となっています。

TMでは、霊界の人々の導きや、祈りがそのために大きな意味を持っているという事実が分かっていません。TM瞑想は、霊との係わりという祈りにおける重要な一面を、初めから捨て去ってしまっています。TM瞑想は、霊の存在を全く無視した単なるサイキックの手法に過ぎません。そうした瞑想法では、いつまでたってもサイキック・レベルを抜け出すことができず、さらに高次のスピリチュアル・レベルに至る道が完全に閉ざされてしまっています。

シルバーバーチは、霊的存在を意識しない祈りや瞑想に対して、次のように言っています——「もし

も宇宙の最高神と直接の交流が持てるとすれば、指導霊のような中間的存在は無用となるでしょう。が、そんなことが出来るかのごとき言葉を耳にすると、私は“キザな霊的俗物根性”の響きを感じずにはいられません。」(最後の啓示・86)

霊界の霊達との係わりを持たない瞑想は、本質的に片手落ちの瞑想ということなのです。

地上世界の浄化は、 TMではなくスピリチュアリズムによる

1990年1月、マハリシは地上天国を実現するとの決意を表明し、具体的な活動を開始しました。そしてマハリシ・シティーという理想都市・共同体を建設することに着手しました。ストレス・公害・犯罪・騒音から解放され、暮らしの質を最高度に高めるよう設計された建物やインテリアを備えた具体的な理想世界の建設を始めました。

しかし、こうした意欲的な試みも、間違いなく失敗に終わることになるでしょう。なぜなら地上世界の浄化は、TMの瞑想人口が増えたり、理想都市の建設によって進められるものではないからです。

地上世界の浄化は、スピリチュアリズムに係わる霊達の一大組織によって進められています。霊界側からの働きかけなくして、地上人類の霊的進化はあり得ません。霊界の高級霊からもたらされた「霊的真理」を受け入れ、それを実践に移す地上人が一人また一人と増えることによって、地球はより良い惑星へと進化していくのです。今この時も、地球の霊的浄化は、霊界の霊達の計画にそって着実に進められています。地上世界は、霊界あげての地上救済の働きかけによって、今、霊的向上の道を歩むことが可能となっているのです。

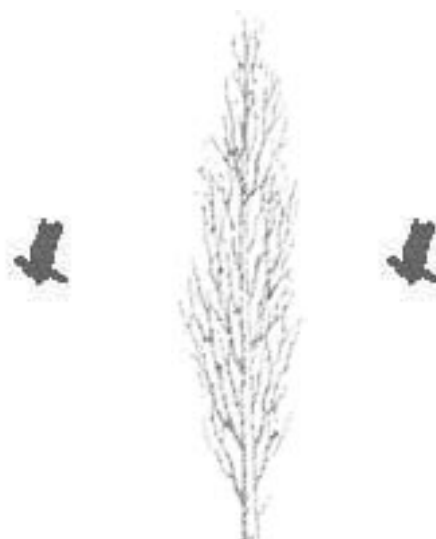
以上、TM瞑想について見てきました。TMは単なる心理的・生理的効果を期待するにはとても優れた方法・手段と言えます。スピリチュアリズムの観点に照らしても評価できる内容を持っています。しかし、それを「霊的観点」から見ると、真に評価に値するものは、ほとんどないということになります。

2 || 伝導瞑想 (トランスミッション・ メディテーション)

「大救世主マイトレーヤによらい如来」と、
ベンジャミン・クレーム

1922年生まれの子供イギリス人、ベンジャミン・クレームは、公表されたプロフィールによると、画家で密教学徒であり、深い知識と体験を備え、超能力を持っているとされています。彼はまた、これまでUFOや宇宙人との接触があったとも紹介されています。そのベンジャミン・クレームは、1972年の終わり頃から、「マイトレーヤ」と呼ぶ如来からのメッセージを受けることとなります。

「マイトレーヤ」とは、釈迦しゃかが末法の世に現れると予言した弥勒菩薩みろくぼさつのことです。ベンジャミン・クレームによれば、このマイトレーヤは、まさに神が人類に遣わされた大救世主であり、全人類のための最大の導師なのです。世界の大宗教がこぞって予言し待ち望んできた救世主であり、仏教で言われてきた弥勒菩薩、キリスト教で言うキリスト再臨主、イスラム教のイمام・マーディー、ヒンズー教のクリシュナの再臨者と同一人物ということになります。



マイトレーヤの地上降臨

マイトレーヤは、地上の全人類を苦境から救い出し、神の啓示を授け、地上に天国を建設するために降臨するということですが、ベンジャミン・クレームは、この「マイトレーヤの降臨」について驚くようなメッセージを伝えています。

それは1977年に、すでにマイトレーヤの地上降臨が行われたと言うのです。マイトレーヤが肉体を持った一人の地上人として、地球上に存在していると言うのです。そしてその肉体を持って降臨したマイトレーヤは、現在まで、全人類の前に救世主として公に登場する時を待っていると述べています。

1982年には、ベンジャミン・クレームは、さらにマイトレーヤについての詳しい情報を伝えています。それによれば、マイトレーヤは1977年7月に、ヒマラヤの山上、5400 mの光のセンターから降り、インド大陸からロンドンに入ったと言います。そして最初の拠点地を、ロンドン市内のインド・パキスタン系移民の住む貧民街に選び、そこでありふれた素朴な男として徐々に人前に姿を現していく過程を歩んでいると述べています。

その受肉化したマイトレーヤは、ベンジャミン・クレームを通じて、「可能な限り最も早い時期に、一刻の猶予も許さず私自身を顕し、世界の前に登場することが私の意図である。私をただちに発見してくれることに多くのことがかかっている」とメッセージを送っています。ベンジャミン・クレームは、そのマイトレーヤからのメッセージを踏まえて、次のように述べています。「残念ながら世界の責任あるマスコミは、いずこもロンドンへ行ってマイトレーヤ探索のための労を取ることをせず、マイトレーヤはいまだに待っておられる」と。

いまだに姿を見せないマイトレーヤ

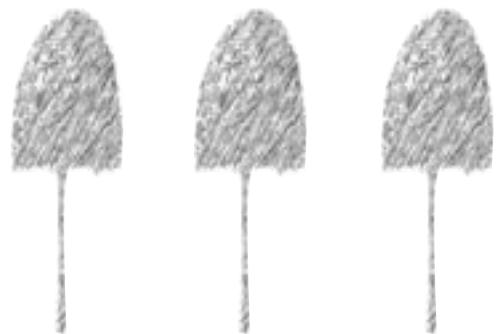
ベンジャミン・クレームは、マスコミの怠慢によって、マイトレーヤは現在まで世界人類の前に出られないでいると非難しています。一方、ベンジャミン・クレームのメッセージを信じた人々は、マイトレーヤが世界人類の前に現れる時を、今か今かと待ち望んできました。

ベンジャミン・クレームは、これまでマイトレーヤが人々の前に現れる日時まで発表したことがありましたが、その度に、マイトレーヤの出現は空振りに終わっています。しかしその後も、彼は、マイトレーヤの登場の準備をするために選ばれた代表として、その役割を果たそうと活動しています。しかし今日この時に至っても、マイトレーヤは、出現を待ち望む人々の前にさえ、その姿を現してはいません。

マイトレーヤとベンジャミン・クレームとの特殊な通信方法——オーバーシャドウ

ところでベンジャミン・クレームは、マイトレーヤからのメッセージを、どのようにして受信しているのでしょうか。彼は、その方法を「オーバーシャドウ」と呼んでいます。オーバーシャドウとは、意識の伝達がテレパシーによって行われることであり、マイトレーヤがベンジャミン・クレームの肉体を使ってメッセージを送ることであると説明しています。要するにオーバーシャドウとは、高度な心的テレパシーのことと考えられます。

こうした説明を聞く限り、明らかに「チャネリング」と同じものと思われそうですが、ベンジャミン・クレームはそれを強く否定します。彼はオーバーシャドウは、一般の霊媒現象やチャネリングとは異なるものであることを盛んに強調します。マイトレーヤはオーバーシャドウという特殊なテレパシーによって、ベンジャミン・クレームにのみ、メッセージを送っていると言うのです。



マイトレーヤの靈的エネルギーを、地上世界にもたらす手段——「伝導瞑想」

ベンジャミン・クレームは、マイトレーヤの地上降臨に先立つ1974年に、天上界のエネルギーを地上世界に伝導する（もたらす）ためのグループを結成することにしました。そして天上界の高度なエネルギーを受け止め、変圧し、伝送する仕事に着手しました。そのエネルギーのトランスミッション（変換伝導）の手法として彼が示したのが、「伝導瞑想」だったのです。

伝導瞑想は、マイトレーヤが神から受けたエネルギーを、地上人類に配布する手段であり、それに係わる者は、光の通路（チャンネル）として全人類に対して奉仕をすることになるとされます。伝導瞑想は、それ自体が世界への奉仕という利他的な行為になっていると言うのです。

ベンジャミン・クレームの伝導瞑想だけは特殊

ベンジャミン・クレームの発言の中には、注目すべき内容があります。それは彼が出席する伝導瞑想においてのみ、マイトレーヤのエネルギーのオーバーシャドウが起こることです。これは別の言い方をすれば、ベンジャミン・クレームが出席していない伝導瞑想の集まりでは、マイトレーヤの直接的なエネルギーのオーバーシャドウは生じないということになります。

ベンジャミン・クレームが加わるときのみ、グループ全体がマイトレーヤのエネルギーによってオーバーシャドウされることになり、それによって参加者の靈的成長が助長され、それ以後は、各人のエネルギー伝導能力が高まると言うのです。したがってベンジャミン・クレームが、世界各地で伝導瞑想の集いを持つことにより、それにたずさわる人々の靈的成長が促され、世界人類がいつそう向上することになります。

以上、マイトレーヤとベンジャミン・クレーム、並びに伝導瞑想について述べてきました。次にこれらを、スピリチュアリズムの観点から検討していくことにします。

伝導瞑想の本質は「再臨運動」

ベンジャミン・クレームが一貫して係わってきたのは、マイトレーヤの降臨です。彼がこれまで語ってきた内容は、一言で言えば「再臨思想」であり、その活動は「再臨運動」ということになります。伝導瞑想として知られている瞑想法の本質は、この再臨運動の一環に他なりません。

さてこの再臨思想ですが、これには2つの異なる立場（考え方）があります。一つは、「肉体再臨説」で、キリストが肉体を持って再臨する、すなわち地上人として生まれるとする見解です。もう一つが、肉体を持たない形でキリストが再臨するというもので、「靈的再臨説」と言います。ベンジャミン・クレームは明確な「肉体再臨説」を唱え、しかもその内容は、キリストはすでに地球上で生活しているという、きわめて具体性をともなったものとなっています。

スピリチュアリズムでは「靈的再臨説」を主張します。ただし、イエス本人が降臨するという一般的な靈的再臨説とは根本的な部分で異なっています。イエスの再臨とは——「イエスの靈的影響力の地上への再出現」のことであり、これが取りも直さず「再臨のイエス」という言葉の真意であるとしています。スピリチュアリズムとは、イエスの靈的影響力を地上世界にもたらすために展開されている手段なのです。

したがって「スピリチュアリズム」こそが、人類が長い間待ち望んできたイエスの再臨の実態ということになります。20世紀以降、地球上においてこうした再臨思想が盛んに話題に上るようになったのは、靈界において、イエスを頂点とする地上救済の大プロジェクトが活発に進められてきたからなのです。



「肉体再臨説」の間違い

肉体再臨説は、霊的影響力の到来を、イエス自身が肉体を持って再び地上に現れると錯覚したものです。なかにはイエス本人が、手足をクギで打ち抜かれた傷痕のある肉体を持って地上に現れるといったことを、まともに信じている人々もいます。またイエスと同一人物ではないにせよ、キリストとしての使命を持った人物が、再臨のメシアとして地上に生まれると唱える一派もあります。

結論を言えば、どのような形であれ、キリストが肉体を持って再び出現することは決してありません。もちろんベンジャミン・クレームが言うような、キリスト・マイトレーヤが肉体を持って地上に出現するというようなこともありません。

キリストが地上に再臨するという点については、スピリチュアリズムとベンジャミン・クレームは同様です。ただしその具体的な内容となると、両者では全く異なっているのです。

どれだけ待っても、マイトレーヤは現れない

「肉体再臨説」が事実でない以上、今後、ベンジャミン・クレームやその信奉者達が、どれほど肉体を持ったキリスト・マイトレーヤとの対面を待ち望んでも、それが実現することはありません。彼はいまだに、本当に心の底からキリスト・マイトレーヤの出現を事実だと信じているのでしょうか？

もしかしたらベンジャミン・クレーム自身は、自分の言ったことの間違いに、すでに気づいているかも知れません。25年前に宣言した「マイトレーヤ降臨」のメッセージの誤りを自覚し、その大きな勘違いに不安を感じているかも知れません。あるいはかつて受けたメッセージが偽物であったことに気がついたものの、後に引けずに、あれこれと姑息な策をめぐらしているのかも知れません。



チャネラーとしての未熟性か、意図的な嘘の塗り固めか

ベンジャミン・クレームが「肉体再臨説」を唱えるという決定的な間違いを犯してしまった理由として、彼がチャネラーとして未熟であったことが考えられます。霊界からの象徴的メッセージの意味を取り違えたのか、あるいは低級霊からの通信を見抜くことができずに、それをまともに受け入れてしまった可能性が考えられます。

理由は何であれ、こうした人々を惑わすことになる重大な間違いは、ベンジャミン・クレーム自身が訂正しなければなりません。地上に生きている間に、勇気を持って自分の間違いを撤回しなければなりません。さもないと霊界において事の真相が明らかになったとき、身の置き場がないようなことになってしまいます。これはニューズレターで以前にも取り上げた、新新宗教の教祖達にも同様に言えることです。

しかしベンジャミン・クレームの行動を見る限り、今も架空の使命にしがみつき、嘘を嘘で塗り固め、さらに事実から外れた方向に走り続けています。間違いを訂正するどころか、ますます霊的事実から懸け離れた方向に人々を導いていこうとしているように見受けられます。

伝導瞑想の独断性——霊的な根拠のない伝導瞑想

ベンジャミン・クレームは、自分達に人類最高の奉仕の道として伝導瞑想が示されたと言っています。伝導瞑想は、神から与えられる霊的エネルギーを、地上世界に伝えるための手段としての瞑想方法であり、高度な源であるハイアラキーと、低い源である人類を結ぶ橋であるとも述べています。

伝導瞑想は、個人の霊的成長のために行うことを目的としたものではなく、あくまでもグループとしての集団奉仕の一形態であると言います。伝導瞑想に参加することは、霊界と地上のつなぎ役を果たすことであり、それ自体が奉仕となり、信仰実践とみなされています。したがって長時間にわたって伝導瞑想することは、それだけ多く人類に奉仕すること

になり、信仰が深いということになります。そのため信奉者達には、何時間もの伝導瞑想が当然のこととして要求されるのです。

ベンジャミン・クレームは、その正当性を、ヨーガや神智学・心霊学の知識を駆使して語り、また彼自身が勝手に作り上げた独断的見解によって主張しています。その結果、程度の悪い新新宗教の教祖達と同レベルに墮ちてしまっています。彼は伝導瞑想というグループの奉仕活動に加わることによって、地上人類に最高の貢献ができると言っています。それと同時に、個人的には、普通の努力の10～20年分の霊的成長が1年で可能になるなどと、霊的事実に照らしたとき何の根拠もないことを平気で言っています。

スピリチュアリズムにおける祈り・瞑想は、日常生活で失われていた霊的意識を取り戻すための実践です。さらには霊的エネルギーを取り入れることによって霊的意識をアップさせるための一つ的手段なのです。その結果として、霊界の人々との結束を強め、利他愛実践・奉仕のための援助を得られるようになるのです。スピリチュアリズムにおける祈り・瞑想は、どこまでも利他愛実践のための手段・下準備の行為であるということなのです。瞑想それ自体が、人類への奉仕の代用となったり、信仰の目的そのものになるということはないのです。

“洗脳”の手段となっている伝導瞑想

自分達だけが世界人類を救えるのだと思い込み、情熱をかき立てて邁進していく姿は、多くの宗教（*特に新興宗教や新新宗教）に共通して見られます。ここでは狂信的な使命感を植え付けることが、常套手段となっています。一人一人の信者は皆、善人であり純粋に人々のために尽くしたいという誠実な思いを持っています。しかしその善良さが逆に、いつの間にか自分を、一人の人間のカリスマ形成に加担させることになってしまいます。そして教祖に対する狂信者にすり変わってしまうのです。

スピリチュアリズムは——「地上のどのような人物も崇拜の対象としてはならない、たとえそれが霊的存在であっても……」と教えています。

伝導瞑想における大きな問題点は、瞑想という本来ならば各自の霊性進化のための手段が、ベンジャミン・クレームという一人の人間をカリスマ化するための道具となっている、ということです。ベンジャミン・クレームは明らかに、霊的事実に対する背信行為と、人々に対する詐欺的行為を行っています。伝導瞑想は、霊界からの指示によるものではなく、ベンジャミン・クレーム個人が意図的に作り上げた人工的手段としか考えられません。

ベンジャミン・クレームは、自分が参加する伝導瞑想においてのみ、マイトレーヤとのオーバーシャドウが起こると言っています。それ以外では決して起こらないと断言しています。オーバーシャドウとは、マイトレーヤのエネルギーがベンジャミン・クレームを覆う状態になることです。したがってベンジャミン・クレームが参加する伝導瞑想においてのみ、参加者はマイトレーヤの霊的エネルギーを直接受けることができるということになります。

これは結論を言えば、ベンジャミン・クレームを無条件に「霊的カリスマ」とすること以外の何ものでもありません。霊的エネルギーを一人の人間が独り占めするようなことができるはずがありません。ここまでくると伝導瞑想は、相手の霊的無知に付け込んで“洗脳”する、この世の偽宗教と全く変わらないことになってしまいます。

エネルギー放射の写真は、単なるサイキック現象

伝導瞑想では、ベンジャミン・クレームがマイトレーヤによってオーバーシャドウされた時の、エネルギー放射の写真が公表されています。しかしその写真は、何も彼らの言っているようなオーバーシャドウが現実には生じていることを証明するものではありません。程度の悪い新新宗教の教祖が講演している時にも、この種の写真はよく撮られます。

狂信者の集会では、神経の興奮状態がピークに至ると、それによって引き出された莫大なエネルギーが、さまざまな異常なサイキック現象や心霊現象を引き起こします。敏感な参加者はヒステリック状態になったり、泣き叫んだり半狂乱になったりします。

また時には異言などの心霊現象が生じることもあります。それをある人は、神の霊・聖霊に包まれたと錯覚します。普段は霊的に鈍感な人でも、こうした集会に参加すると異様な雰囲気巻き込まれ、ある種のサイキック的な感覚を味わうことになります。一時的にオーラを見るようなことも起こってきます。教祖のまばゆいばかりのオーラが見えたと言う人も現れます。

狂信が異常なエネルギーを生み出し、これがさらに霊界の低級霊の結集を促すことになります。そうなれば洗脳は、いとも簡単に進んでいくことになります。普段では体験したこともないような経験をすることからです。そうしたサイキック・エネルギーが異常に高まった状況下では、エネルギーが念写によって写し出されるようなことも起こります。オーバーシャドウ時に撮られたエネルギー放射の写真が、もしトリックでないとしたなら、まさにこれと同じものと考えべきなのです。

ベンジャミン・クレームの正当性を認める 高級霊はいない

ベンジャミン・クレームが自ら言うような、彼の方に与えられている特殊な霊的立場というようなものは事実ではありません。彼を通じなければ、マイトレヤとの霊的一体化がなされないという霊的事実もありません。霊界の高級霊に質問してみれば、その間違いは明白です。霊的事実と根本的に食い違っている伝導瞑想の正当性を、認める霊は一人もいないはずで

す。ベンジャミン・クレームの発言については、細部にわたって批判すべき点が多々ありますが、要は伝導瞑想が本物の瞑想ではないこと、ベンジャミン・クレームという一人の人間によって作り出された人工的な手段に過ぎないことを理解しておくだけで十分です。伝導瞑想は、ベンジャミン・クレームの言うような霊的エネルギーを地上にもたらず特別な手段ではありません。またオーバーシャドウという特別なコミュニケーションの手法も存在しません。もしこれに類するような現象が実際にあるとするなら、それは誰もが体験することができる、ごくあり

ふれた霊との交わりであったり、守護霊を通じての神との触れ合いに他なりません。

繰り返しますが、霊界のどこを探しても、ベンジャミン・クレームの言説を認める霊は存在しないということです。こうしたことがあるためベンジャミン・クレームは、メンバーが霊界からの通信を受けることを躍起になって否定しようとしているのでしよう。霊界からのメッセージを受け取ることができない人間が彼以外にいては、都合が悪いからです。彼のこれまでなしてきた不正な行為や作り話の数々は、霊界では、すべて白日の下にさらされることになります。今はベンジャミン・クレームを信じている人々も、霊界に行った時には、その間違いをはっきりと理解することになるはずで

す。スピリチュアリズムは、霊的事実を地上人類に明らかにするために、霊界の高級霊の綿密な計画によって進められてきました。そこには、人類がこれまで明確に知ることができなかった「霊的真理」がはっきりと示されています。これまで伝導瞑想を実践してきた方々には、ぜひじっくりとシルバークに代表される「霊界通信」に目を通していただきたいと思います。霊界から届けられた生の情報を、ベンジャミン・クレームが語った内容と比較していただきたいと思います。

幸いなことに、スピリチュアリズムと伝導瞑想には共通性が多く、同じ土俵の上で比較することができます。 「霊訓」を読めば、伝導瞑想とスピリチュアリズムとの違いを容易に理解されるはずで



2月18日、滞在先のニューヨークのホテルで、たまたまテレビを見ていました。その日は丁度、プレジデント・デイ「大統領の日」で、それにちなんでABCテレビでは、「ケネディー家の特集番組」を放映していました。

アメリカでは毎年、歴代大統領に対する人気投票が行われ、その結果がこの日に発表されます。今年もリンカーンが1位でした。これまでの人気投票の結果を総合すると、1位リンカーン、2位J. F. ケネディーとなります。

アメリカ人が最も偉大な大統領と考えている「リンカーン」は、生前、交霊会に深い関心を示し、霊の声に耳を傾けていたことがよく知られています。有名な“奴隷解放宣言”は、当時の政治的情況に発表を渋っていたリンカーンに対して、霊側が催促するという形で、1861年に実現しました。

そのリンカーンは現在、霊界でシルバーバーチ霊団の一員として働いています。シルバーバーチの部下の一人として、スピリチュアリズムのために働いているのです。

こうしたことは、アメリカ人にとってなかなか受け入れ難いことかも知れませんが、紛れもない霊的事実なのです。アメリカの歴代大統領の中で最も偉大なリンカーンは、今、霊界で、私達地上のスピリチュアリストと同じ方向に向かって努力しています。その意味で、リンカーンにとって一番身近な存在は、アメリカ国民ではなく、私達スピリチュアリストということになるでしょう。

アメリカ人がリンカーンに次いで偉大な大統領と考えている「J. F. ケネディー」は、どうでしょうか。アーリントン墓地にあるケネディーの墓には、毎日大勢の人々が訪れ、アメリカ国民の間における



ワシントンにある「リンカーン記念館」のリンカーン像

彼の人気の高さをうかがわせます。

ケネディーの墓の隣には、ジャクリーン夫人（*オナシスと再婚。オナシスの死後米国に戻り、他の男性と同居、死を迎えた）の墓、流産した未熟児、生後数カ月で亡くなった赤ちゃんの3つの墓が並んでいます。去年、飛行機事故で死んだ息子J. F. ケネディー・ジュニアの墓は、ここにはありません。生前の彼の意向を尊重して、海に散骨したということです。

故J. F. ケネディー大統領は、近年、某霊媒者を通じて、地上に通信を送ってきています。それによると、霊界に行ったケネディーは、自分の霊的内容のなさを痛切に感じたようです。そして次のようなことを言っています——「わたしは、あのような高い地位にふさわしい人間ではありませんでした。あの地位は、努力ではなく金で手に入れたものであり……。いまにして思えば、わたし自身の外部にあり、あなた方の世界の外部にあるもっと大きな力

が（暗殺という形で）わたしをあの地位から解放してくれたということがわかります。」

この霊界通信が本物かどうかの確証はありませんが、生前のケネディーの行状を考えると、「なるほど……」と頷けます。ケネディーの女好きは広く知られていましたが、それは彼の本性・霊性の内容の一部を示しています。政治家としての力量は優れていたものの、霊的存在としての内容は、それほどはなかったようです。

さて英国では、去る2月9日にマーガレット王女（*エリザベス女王の妹）が71歳で死去されました。

イギリス王室のスピリチュアリズムとの深い係わりは、ビクトリア女王の時代に始まっています。夫アルバートの死後、ビクトリア女王は交霊会にのめり込み、「霊のお告げで政策を決定している」とまで批判されるほどでした。

近年では、故アスローン伯爵と故マリー・ルイーゼ王女が、何度もハリー・エドワーズ治療院に足を運び、“スピリチュアル・ヒーリング”を受けていたことが知られています。2人は熱心なスピリチュアル・ヒーリングのファンだったのです。マリー・ルイーゼ王女は、エリザベス女王の戴冠式に出席するため、その2日前に老体に鞭打ってハリー・エドワーズの所へ足を運び、霊的エネルギーを補給してもらって式典に臨みました。

最近では、アン王女がスピリチュアル・ヒーリングを受けたことや、チャールズ皇太子がスピリチュアル・ヒーリングも含めたホリスティック医学に、積極的に協力していることが知られています。

先頃亡くなったマーガレット王女ですが、彼女は生前から霊的世界についての知識を持っていました。死後の世界の実在や、ここでは一切の肉体的苦しみがなくなることや、死は第2の人生の出発であることなどを、しっかりと認識していました。

話は溯りますが、ジョージ6世（*エリザベス女王・マーガレット王女の父君）が死去された際、しばらくして密かに“交霊会”が催されました。霊媒は有名なリリアン・ベイリーで、彼女は交霊会の参加者の身

元を一切知らされていませんでした。リリアン・ベイリーは霊媒の務めを果たし、深いトランス状態から醒めて目を開けたとき、初めて参加者が王室一族であることを知りました。エリザベス女王、女王の母君（*クイーン・マザー、彼女はジョージ6世の妻で現在101歳）、アレクサンドラ王女、フィリップ王子、そしてケント公爵夫人であることに気がついたのです。

マーガレット王女は、その交霊会には参加していませんでしたが、交霊会で父親の霊が現れ喋ったことを、間違いなく聞いたはずです。その後、クイーン・マザーは、何度もベイリー夫人を呼んで交霊会を持つことになりました。



さて故ダイアナ妃が、英王室内で唯一頼りにしていたのが、マーガレット王女であったことはよく知られています。ダイアナ妃とマーガレット王女には、本人自身の不倫・夫の不倫・離婚という、どろどろした共通の人生経験があります。

ダイアナは、多くのスキャンダルを引き起こし、英王室の伝統的権威を大きく傷つけることになりました。しかしその一方で、リタ・ロジャーズという女性霊媒者と親しく交わり、彼女の熱烈な信奉者でもありました。ダイアナは、霊界からのメッセージに耳を傾けるという一面も持っていたのです。

ダイアナは、交通事故で死ぬ半月前に、彼女と一緒に事故死することになる恋人ドディーとともに、ヘリコプターでリタの家を訪問しています。そして事故の前日には、パリからイギリスの彼女の家に電話をしています。（*リタ・ロジャーズとダイアナについては、最近発刊された『愛の絆』野村安正訳・中央アート出版社に詳しく述べられています。）

英国王室はこれまで、さまざまなセックス・スキャンダルを引き起こし、肉体的煩惱にふり回される地上人の醜い姿を露呈してきました。しかしその一方で、大勢の王室関係者が霊の存在を信じ、交霊会に参加するという、スピリチュアリズムとの係わりを持ってきました。物質世界での多くの煩惱に^{ほんろう}翻弄されながらも、霊界の存在を信じ、霊のメッセージを求めるといふ素朴な霊的姿勢を持ち続けてきたのです。

シルバーバーチは、英王室存続についての意見を求められたとき——「国民の心を一つにするものは大切にすべきです」と答え、王室の存続に肯定的な見解を述べています。シルバーバーチがこうした見解を述べたのは、英王室がスピリチュアリズムのPRに大きな貢献をしているという一面も考慮していたものと思われます。



スピリチュアリズム・ビデオ&テープ ライブラリー

VIDEO

ビデオ『地球人類の霊性進化の道 “スピリチュアリズム”』

— 霊的真理のエッセンス・真理編 —

(価格)

「真理編・前編」 2時間テープ 1本……2000円

「真理編・後編」 2時間テープ 2本……3500円

※別途、送料がかかります。

当サークルでは、スピリチュアリズムによってもたらされた「霊的真理」を、より多くの方々に正確に理解していただくために、「真理編」のビデオを作成しました。このビデオは、膨大な真理を簡潔にまとめ、誰にでも分かりやすい言葉で説明しています。入門者にかぎらず、これまで長年「霊訓」に親しんでこられた方にとっても、驚くような新鮮さと、真理の深い理解にともなう感動を得ていただけるものと確信しています。またこのビデオは、「読書会・学習会」を進める上においても、最適の教材になるものと思います。

すでにビデオをご覧になった方々から、多くの感動と感謝の声が寄せられております。「今まで本で読み、分かっていたつもりだったけれど、このビデオによって初めて、スピリチュアリズムの一番肝心な点が明確になりました」という感想を、何人もの方々からいただいております。

本を読むのは大変だという方も、ビデオによる学習ならば、ポイントを押さえながら、一気に全体を通して学ぶことができます。スピリチュアリストにとって、「霊的真理」を理解することは最も大切なことですが、このビデオは、そのための大きな助けになるものと思います。

TAPE

スピリチュアリズム関連書籍の 「朗読テープ」

「スピリチュアリズム入門」 90分テープ 4本…… 1600円

「続スピリチュアリズム入門」

90分テープ 5本
60分テープ 1本 > 計6本 2500円

「500に及ぶあの世からの現地報告」

90分テープ 8本…………… 3000円

※別途、送料がかかります。

これまで数多くのスピリチュアリズム関係の書物を読まれたにもかかわらず、その本質を十分理解できないままの方々が大勢いらっしゃいます。そのような方が、当サークル出版の『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』を読まれ——「初めてスピリチュアリズムの素晴らしさが分かりました。霊的真理のアウトラインが理解できました」と、感想を述べてくださっています。

そうした方々の中から、ぜひこれらの本をテープにしてほしいとの要望が寄せられておりましたが、この度、サークルのメンバーによって、『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』『500に及ぶあの世からの現地報告』の3冊の朗読テープが完成しました。

早速テープを聴かれた方々から——「真理が心に沁みわたり、深い霊的世界に包まれるような体験をしました」「一緒に霊的サークルに参加しているようで、落ち込んでいた心が引き上げられました」といった感想をいただきました。また、「サークルの学習会でこのテープを聴くことによって、全員が霊的啓発を受け、霊的な感動にひたることができました」とおっしゃる方もみえました。

皆さん一様に、本ではなかなか得られない霊的雰囲気や、この朗読テープを通じて身近に体験されるようです。予想を超えた反応に、私達も驚き嬉しく思っています。皆さんがこのテープによって、霊的真理の正確な理解とともに、深い霊的世界にふれ、心を高めてくださることを願っています。

(※なおこのテープは、自由にダビングしていただいて差し支えありません。)

⇒ スピリチュアリズム・ライブラリー ⇐

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

- ◆スピリチュアリズム入門 (169頁)
ースピリチュアリズムが明かすー「心霊現象のメカニズム&すばらしい死後の世界」
- ◆続スピリチュアリズム入門 (256頁)
ー高級霊訓が明かすー「霊的真理のエッセンス&霊的成長の道」
- ◆スピリチュアリズムの真髄「現象編」 (297頁)
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著/近藤千雄 訳
- ◆スピリチュアリズムの真髄「思想編」 (357頁)
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著/近藤千雄 訳
- ◆500に及ぶあの世からの現地報告 (437頁)
ーエクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活ー
『Life After Death』 ネヴィル・ランダル著/小池 英 訳
- ◆マイヤースの通信ー永遠の大道 (全訳) (271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミングズ著/近藤千雄 訳
- ◆マイヤースの通信ー個人的存在の彼方 (全訳) (304頁)
『Beyond Human Personality』 G・カミングズ著/近藤千雄 訳
- ◆霊訓 (完訳・上) 『The Spirit Teachings』 (225頁)
ステイントン・モーゼス著/近藤千雄 訳
- ◆霊訓 (完訳・下) 『The Spirit Teachings』 (260頁)
ステイントン・モーゼス著/近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチは語る (443頁)
『Teachings of Silver Birch』 A. W. オースティン編/近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓
ースピリチュアリズムによる霊性進化の道しるべー
『A Voice in the Wilderness』 トニー・オーツセン編/近藤千雄 訳
- 〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編/近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編/近藤千雄 訳
- ◆ジャック・ウェバーの霊現象 『The Mediumship of Jack Webber』
ハリー・エドワーズ著/近藤千雄 訳
- ◆妖精物語 『The Loming of the Fairies』
A・コナン・ドイル著/近藤千雄 訳

“スピリチュアリズム・ニュースレター” について

サッカーのワールドカップ（W杯）が近づき、サッカー熱が日本中を覆い尽くしています。国も地方自治体も国民も、皆、興奮しています。しかし考えてみれば、たかがサッカー、たかがスポーツにすぎません。

そもそもスポーツは、人々に健康やリラックス・ほど良い娯楽をもたらしてこそ意味を持つものです。今のW杯の熱狂ぶりは異常です。動物的本能を刺激し、低級霊の暗躍する場所を提供するだけのものになっています。

こんなW杯など、むしろやらない方が国民のためと言えるでしょう。日本は、ゲームの勝ち負けや、金メダルの数にムキにならないスポーツ小国でけっこうではないでしょうか。レクリエーション程度にしかスポーツに関心を示さない文化・精神国家こそ、今後の日本が目指すべき方向性ではないでしょうか。

※このニュースレターは、「真摯にスピリチュアリズムを学びたい、実践したい」という方々のお役に立つことを願い、発行いたしております。

初めてこのニュースレターを希望される皆様へは、まず創刊号～5号までお送りいたします。（*ご依頼のあったお知り合いの方へも、同様に5号までお送りいたします。）

6号以降のニュースレターにつきましては、ホームページで主要な内容はほとんど公開しておりますので、それをご覧になってください。

ただし当サークル出版の書籍やテープをお求めいただいた方で、ご希望があれば、6号以降の分につきましてもお送りいたします。また今後の発行分も継続してお送りいたします。（*すべて無料です。）

ご不明な点はお問い合わせください。



Spiritualism Circle
Kokoro no Dojo